

西魏・北周政権の北辺経営 -オルドス地域を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学東洋史談話会 公開日: 2020-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀井, 裕之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21102

《論説》

西魏・北周政権の北辺経営 ―オルドス地域を中心に―

堀井 裕之

はじめに

隋唐政権の形成過程について、近年では、森安孝夫氏⁽¹⁾や石見清裕氏⁽²⁾によって、後漢・西晋末の五胡諸族の華北移動から始まる東ユーラシアの民族移動と国際情勢の変遷を軸にして考えるべきであることが提唱されている。特に両氏は、五胡十六国・北朝期の鮮卑拓跋部、唐末五代の突厥沙陀部などの諸勢力を育んだ「農牧接壤地帯」に注目する。同地帯は、河北・山西・陝西三省の北部・寧夏回族自治区・甘肅省に跨るベルト状に広がる半農半牧地帯で、中華世界から見れば所謂「北辺」地帯に該当する。両氏は遊牧民と農耕民の両勢力が交差する同地帯の動向こそが、中国を含めた東ユーラシアの歴史を左右したと主張するのである⁽³⁾。

本稿が取り上げる西魏・北周も北魏滅亡の原因となった六鎮の反乱によって、オルドス北端の武川鎮から関中へ移動した人々を中心になって形成された政権であり、「農牧接壤地帯」より勃興した勢力の一つと言える。やがて彼らが南北朝を統一し、隋唐政権を打ち立てることとなるのである。その「農牧接壤地帯」の動向をふまえて唐朝政権の形成を明らかにした先駆的な研究として石見清裕氏の成果⁽⁴⁾が挙げられるが、同氏によると、李淵の太原挙兵と関中平定には、匈奴系費也頭を中心とする遊牧勢力の支援があったという。近年の研究では、平田陽一郎氏による隋朝の建国過程を突厥との外交関係を視野に入れて捉え直し、東ユーラシアの国際関係と北周の華北統一から「周隋革命」に至る華北情勢とが連動していたことを明らかにした一連の成果がある⁽⁵⁾。そのほか、斉藤茂雄氏によって、隋末唐初の北辺の割拠勢力の動向が唐朝と東突厥の抗争に影響を与えたことが指摘されている⁽⁶⁾。

このように近年では、隋唐政権の形成を考えるに際して、東ユーラシア世界の国際情勢や「農牧接壤地帯」の動向を視野に入れて明らかにしていくことが、不可欠となりつつある。先行研究では、中国王朝の興亡に周辺勢力が如何に左右したのかという点に比重が置かれている。それとは別に西魏・北周がどのようにして複雑な国際情勢を切り抜け北辺地帯を経営し、隋唐政権への道を切り開いたのかという視角も必要であると思われる。国際関係と北辺経営の双方の視点から見ることで、より多角的な隋唐政権の形成過程を描き出せるのではなからうか。そこで本稿では、隋唐政権の淵源である西魏・北周の北辺経営について、夏州・靈州を中心とするオルドス地域に

注目して考察する⁽⁷⁾。

1. 北魏の東西分裂前後のオルドス情勢と在地の諸勢力

本章では西魏・北周期のオルドス経営を考察する前提として、北魏東西分裂前後に勃発した同地域の争奪戦における在地勢力の動向に注目し、その地域の特徴を明らかにする。

さて、北魏末期の太昌元年（532）、六鎮の乱の混乱に乗じて洛陽の朝廷を牛耳っていた爾朱氏も高歓によって倒され、いよいよ北魏が東西に分裂する情勢が形成されつつあった。河北・山西北部は高歓がおさえるところとなり、洛陽の朝廷では高歓の掣肘を受けつつも、孝武帝（出帝、在位 532～535）が中興の道を模索していた。関隴地域では所謂「武川鎮軍閥」を率いる賀拔岳の勢力⁽⁸⁾が台頭しつつあった。

当時のオルドス地域の情勢について、後に西魏・北周の実質的建国者となる宇文泰は、『周書』卷一・文帝紀上によると、上官の賀拔岳に対して次のような意見を具申している。

高歓非人臣也。逆謀所以未発者、憚公兄弟耳。然凡欲立大功、匡社稷、未有不因地勢、総英雄、而能克成者也。侯莫陳悦本実庸材、遭逢際会、遂叨任委、既無憂国之心、亦不為高歓所忌。但為之備、図之不難。今費也頭、控弦之騎不下一万、夏州刺史斛拔弥俄突、勝兵之士三千余人、及靈州刺史曹泥、並恃其僻遠、常懷異望。河西流民紇豆陵伊利等、戸口富実、未奉朝風。今若移軍近隴、扼其要害、示之以威、服之以徳、即可収其士馬、以実吾軍。西輯氐羌、北撫沙塞、還軍長安、匡輔魏室、此桓・文挙也。

高歓は人臣に非ざるなり。逆謀未だ発せざる所以は、公ら兄弟（賀拔岳と賀拔勝）を憚るのみ。然れども凡そ大功を立て、社稷を匡さんと欲するに、未だ地勢に因りて、英雄を総べざれば、能く克成する者は有らざるなり。侯莫陳悦は本より実に庸材にして、際会に遭逢し、遂に任委を叨りにするも、既に憂国の心無く、亦た高歓の忌む所と為らず。但だ之が備えを為せば、之を図るは難からず。今費也頭、控弦の騎は一万を下らず、夏州刺史の斛拔弥俄突、勝兵の士三千余人、靈州刺史の曹泥に及びては、並びに其の僻遠を恃み、常に異望を懐く。河西の流民紇豆陵伊ら、戸口富実なれど、未だ朝風を奉ぜず。今若し軍を移し隴に近づき、其の要害を扼し、之に示すに威を以てし、之を服さしむるに徳を以てし、即ち其の士馬を収め、以て吾が軍を実たすべし。西のかた氐羌を輯め、北のかた沙塞を撫し、軍を長安に還し、魏室を匡輔すれば、此れは桓・文の挙なり。

宇文泰によると、賀拔岳は二方面の敵と対峙していた。一方は言うまでもなく高歓であり、もう一方は、侯莫陳悦である。彼は賀拔岳が爾朱氏に仕えていた頃の僚将で、爾朱氏政権が崩壊すると秦州を拠点にして独立勢力を築いていた。宇文泰の意見は、彼らに対抗するために、費也頭な

どの北辺の諸勢力を服属させて軍事力に転用して関隴地域を平定し、力が衰えた洛陽の朝廷を支えよう、というものであった。費也頭とはオルドスで遊牧を営んでいた匈奴系部族であり、夏州刺史の斛拔弥俄突、河西（オルドス）⁽⁹⁾の流民紇豆陵伊利、後述する万俟普撥・受洛干父子もその一派で、その勢力の一部はオルドス南縁部の夏州周辺にまで及んでいた⁽¹⁰⁾。

この宇文泰の献策を受け入れた賀拔岳はオルドス方面へ進出すべく、当地の諸部族の取り込み動き出した。永熙三年（534）二月、『周書』巻十四・賀拔岳伝によれば、

〔賀拔〕岳自詣北境、安置边防。率衆趣平涼西界、布營数十里、託以牧馬、於原州為 自安之計。先是、費也頭万俟受洛干・鉄勒斛律沙門・斛拔弥俄突・紇豆陵伊利等、並擁衆自守、至是皆款附。秦・南秦・河・渭四州刺史、又会平涼、受岳節度。

〔賀拔〕岳自ら北境に詣り、边防を安置す。衆を率いて平涼の西界に趣き、營数十里を布き、託するに牧馬を以てし、原州に於いて自安の計を為す。是れより先、費也頭の万俟受洛干・鉄勒の斛律沙門・斛拔弥俄突・紇豆陵伊利等、並びに衆を擁して自守するも、是こに至り皆款附す。秦・南秦・河・渭四州の刺史、又た平涼に会し、岳の節度を受く。

とあって、賀拔岳は自ら軍を率いて北上して原州平涼の西境に駐屯し、数十里に及ぶ軍営を連ねて軍馬を放牧した。これは前述した宇文泰の献策に基づいて、軍事的圧力をもってオルドスの遊牧勢力と関隴諸州を服属させるための処置である。その結果、宇文泰の読み通りに、費也頭の万俟受洛干・斛拔弥俄突・紇豆陵伊利・鉄勒の斛律沙門らオルドスの諸部族と隴西地域の秦・南秦・河・渭の四州が服属を申し出た。さらに『周書』巻一・文帝紀上によれば、賀拔岳は立案者の宇文泰本人を夏州刺史に任命し、オルドス南縁部の確保と遊牧勢力の慰撫に当たさせた。

さて、順調に関隴地域の平定を進めていた賀拔岳であるが、靈州刺史曹泥のみ高歓と好を通じて従属を拒んできた。そこで賀拔岳は侯莫陳悦とともに曹泥を討伐しようとするが、逆に高歓と内通していた侯莫陳悦によって暗殺されてしまう。訃報に接し夏州より急ぎ駆け付けてきた宇文泰は、同僚たちに推戴されて賀拔岳の軍団を継承し、侯莫陳悦を討って関中を平定した。一方の高歓は洛陽朝廷の掌握を進めていた。これに対抗すべく孝武帝は反高歓の挙兵を企てて失敗し、宇文泰を頼って関中へ落ち延びるも、間もなく長安で崩御した。ここにおいて宇文泰と高歓は各自で皇帝を擁立し、北魏は東西に分裂することとなった。そして、両雄が初めて戦端を開いた地こそオルドスであった。

まず、このオルドス争奪戦の主導権を握ったのは高歓で、その状況は、『北齊書』巻二・神武下によると、以下の通り記されている。

天平元年正月壬辰、神武西伐費也頭虜紇豆陵伊利於河西、滅之、遷其部於河東。…〔天平〕三年正月甲子、神武帥軍狄干等万騎襲西魏夏州、身不火食、四日而至。縛稍為梯、夜入其城、禽其刺史費也頭斛拔弥俄突、因而用之。留都督張瓊以鎮守、遷其部落五千戸以歸。西魏靈州

刺史曹泥与其壻涼州刺史劉豐遣使請内属。周文困泥、水灌其城、不没者四尺。神武命阿至羅發騎三万徑度靈州、繞出西軍後、獲馬五十匹、西師乃退。神武率騎迎泥・豐生、拔其遺戸五千以帰、復泥官爵。...二月、神武令阿至羅逼西魏秦州刺史・建忠王万俟普撥、神武以衆応之。六月甲午、普撥与其子太宰受洛干、豳州刺史叱干宝楽、右衛將軍破六韓常及督将三百余人擁部来降。

天平元年（534）正月壬辰、神武（高歡）、西して費也頭虜の紇豆陵伊利を河西に伐ち、之を滅ぼし、其の部を河東に遷す。...〔天平〕三年（西魏大統二年、536）正月甲子、神武、犀狄千ら万騎を帥いて西魏の夏州を襲い、身は火食せず、四日して至る。稍を縛り梯を為し、夜に其の城に入り、其の刺史費也頭の斛拔俄弥突を禽にし、因りて之を用う。都督張瓊を留めて以て鎮守せしめ、其の部落五千戸を遷し以て帰る。西魏の靈州刺史曹泥は其の壻涼州刺史の劉豐と遣使して〔高歡に〕内属を請う。周文（宇文泰）泥を囲み、水其の城に灌ぐ、没せざるは四尺なり。神武、阿至羅に命じて騎三万を發して靈州を徑度し、繞りて西軍（西魏軍）の後に出で、馬五十匹を獲り、西師乃ち退く。神武、騎を率いて泥・豐生（劉豐の字）を迎え、其の遺戸五千を抜き以て帰り、泥の官爵を復す。...二月、神武、阿至羅をして西魏の秦州刺史・建忠王の万俟普撥に逼らしめ、神武、衆を以て之に応ず。六月甲午、普撥、其の子太宰の受洛干、豳州刺史の叱干宝楽、右衛將軍の破六韓常及び督将三百余人と部を擁して来降す。

天平元年正月、高歡は河西に進出して賀拔岳に通じていた紇豆陵伊利を滅ぼし、さらに同三年正月に、夏州を急襲して西魏側の夏州刺史で費也頭の斛拔俄弥突を捕え、その部落 5000 戸を連行して帰還した⁽¹¹⁾。高歡が夏州を占領すると、靈州刺史曹泥とその女婿劉豐が高歡に服属を申しでた。これに対して西魏は靈州城を包圍して水攻めにしたが、二月、高歡は阿至羅⁽¹²⁾に命じて三万騎をもって西魏軍の背後を衝かせ、そのまま西魏の秦州刺史万俟普撥を攻撃させた。高歡は西魏軍が包圍を解いた隙をついて、靈州城を放棄した曹泥・劉豐らを迎え入れ、彼らが率いる 5000 戸とともに晋陽へ帰還した。これによりオルドス南西部の要衝である夏州が高歡の掌中に落ち、その結果、六月に入り万俟普撥・受洛干父子、叱干宝楽、破六韓常とその督将 300 人余りが一斉に高歡へ降伏したのである。

宇文泰は夏州を失陥しオルドスの諸勢力が高歡側に付いたことによって、攻撃対象を転じて河東南部・河南洛陽方面に進撃した。『周書』卷二・文帝紀下によれば、

〔大統〕三年冬十月...太祖進軍蒲坂、略定汾・絳。於是許和殺張瓊以夏州降。

〔大統〕三年冬十月...太祖、蒲坂に進軍し、汾・絳を略定す。是こに於いて許和、張瓊を殺し夏州を以て降る。

とあって、宇文泰が河東南部の汾州・絳州を高歓より奪取したことにより、大統三年（537）十月に東魏側の守将である張瓊が部下の許和に殺され、以降、夏州を含むオルドス地域は西魏・北周に帰属することとなった。

以上が北魏の東西分裂によって勃発したオルドス争奪戦の経緯である。次に高歓へ降伏したオルドスの諸勢力が具体的にどのような人々であったのか、詳しく述べておこう。

まず、曹泥については、北魏末に靈州刺史となり賀拔岳・宇文泰に臣属することを拒み高歓に降伏したということ以外、全くその経歴は不明である。ただし、北魏時代に靈州・夏州周辺で曹姓の人物が度々叛乱を起こしていることが注意される。太平真君八年（447）に山胡曹僕渾が河西で朔方の諸胡を率いて叛乱し、延興元年（471）に「朔方民」の曹平原が「不逞」を集めて石楼堡を襲い、正始四年（507）九月に夏州長史の曹明が謀反した。州の僚佐は在地の有力者より登用されるのが慣例で、曹明は夏州の人であろう。さらに北魏末には「朔方胡帥」の曹阿各拔・桑生兄弟が統万城の周辺で蜂起した。これらの事例をふまえて唐長孺氏は、曹氏を朔方（オルドス）の「胡族大族」であると推測している⁽¹³⁾。曹泥もまた彼らの同族と見なせるのではなかろうか。

曹泥の女婿劉豊は、『北齊書』卷二七及び『北史』卷五三に立伝されている。『北齊書』の本伝によれば、

劉豊、字豊生、普楽人也。…破六韓拔陵之乱、豊以守城之功、除普楽太守。魏永安初、除靈州鎮城大都督。周文（宇文泰）授以衛大將軍、豊不受、乃遣攻圍、不克。

劉豊、字は豊生、普楽の人なり。…破六韓拔陵の乱、豊、守城の功を以て、普楽太守に除せらる。魏の永安の初め、靈州鎮城大都督に除せらる。周文（宇文泰）授けるに衛大將軍を以てするも、豊受けず、乃ち遣して攻圍せしむるも、克てず。

とある。彼は靈州に所属する普楽郡の人で、六鎮の乱で破六韓拔陵が郡城を攻撃したのを撃退した功績で普楽郡太守に任命され、永安年間（528～530）の初期に靈州鎮城大都督となった。その後、宇文泰の調略を拒み、靈州刺史曹泥の指揮下で西魏軍に抵抗した。このように彼は高歓に降伏するまで、一貫して靈州周辺で活動していた。前掲『北齊書』神武紀で彼は涼州刺史の官職を帯びているが、実際には赴任していないであろう。

また、劉豊の家系については『元和姓纂』卷五・河南郡劉氏に「代為部落大人。魏有河間公提、生豊、以司徒封〔高昌王〕⁽¹⁴⁾、為河間劉氏。」とあり、本来は代々にわたる「部落大人」の家柄で、彼の代になって漢人名族の河間劉氏を自称した。劉姓であることから推察するに匈奴系と考えられる。近年出土した劉豊の子劉安の墓誌（隋開皇十八年（598）正月葬）⁽¹⁵⁾でも「□諱安、字仁遠、瀛州河間樂城人也、賜屬雍州□□県（□諱は安、字は仁遠、瀛州河間樂城人なり、屬を雍州□□県に賜る）。」とあり、北齊時代に河間を郡望としたことが裏付けられ、更に隋に入仕した劉安が雍州へ本籍を移したことが明らかになる。『元和姓纂』では劉豊を河南劉氏とするのは、

唐代に子孫が自称したためであろう。河南郡は虜姓の代表的な郡望で、北魏の孝文帝が洛陽遷都に伴い北族の本貫を代郡から河南洛陽に改めたことに由来する。そのことから劉豊が北族であることが裏書きできる。

しかしながら、実際には洛陽遷都後も劉豊が依然として靈州普樂郡に居住していたことは、前掲『北齊書』本伝にある通りである。「劉安墓誌」では、劉豊の父劉提が北魏の龍驤將軍・歴城鎮將であったと記している。「歴城」と言えば一般的に現在の山東省済南市に設置された県を想起するだろうが、ここでは隋唐の靈州靈武県、北周の建安県にあたる城邑を指すと思われる。当地には北周から隋代にかけて歴城郡が設置されていたが、郡名の由来は、北魏の太和年間(477~499)に平齊民の中でも齊州歴城の人が徙民されたことに因んでいる⁽¹⁶⁾。『魏書』地形志には記録がないが、恐らく歴城鎮が当地に設置されたのではなかろうか。父が郷里近傍の歴城鎮の鎮將となっていることから、劉豊は代々靈州に居住した在地有力者と見なせよう。彼が本郡である普樂郡太守・靈州鎮城大都督の地位を得たのも、靈州刺史の曹泥の婿となったのも、この推測を裏付ける。

以上に述べた劉豊と曹泥は北族系氏族であったが、部落組織を維持していたかどうかは現存史料からは確認できない。むしろ北魏末の彼らの動向を見ると、城鎮周辺に居住し州鎮に出仕して官吏・軍人となることに経済基盤を置いていた可能性が高い。

万俟普撥・受洛干父子は前述したように費也頭で、この父子はオルドス争奪戦が勃発した当時は西魏側に服属していた。父普撥は秦州刺史として部落を率いて覆鞬城に拠っており⁽¹⁷⁾、息子の受洛干は大都督として趙善が率いる靈州城の包囲軍に加わっていた⁽¹⁸⁾。

叱干宝楽は、前掲『北齊書』神武紀に拠ると幽州刺史であった。『周書』卷一・文帝紀上・永熙三年(534)二月条には、万俟普撥の部将として「叱干保洛」という人物が見えるが、この「保洛」は「宝楽」と同一人物ではなかろうか。なお、叱干氏は薛干とも称される鮮卑系氏族で赫連夏に服属し、その滅亡後に北魏の編民となっており⁽¹⁹⁾、部落組織を維持していた可能性は低い。

破六韓常は、『北齊書』卷二七に立伝されている。それによると、

破六韓常、字保年、附化人、匈奴单于之裔也。…世領部落、其父孔雀、世襲酋長。孔雀少驍勇。時宗人拔陵為乱、以孔雀為大都督・司徒・平南王。孔雀率部下一万人降於尔朱荣、詔加平北將軍・第一領民酋長、卒。常沉敏有胆略、善騎射、累遷平西將軍。高祖(高歡)起義、常為附化守、与万俟受洛干東歸。高祖嘉之、上為撫軍。

破六韓常、字は保年、附化の人、匈奴单于の裔なり。…世よ部落を領し、其の父孔雀、酋長を世襲す。孔雀少くして驍勇なり。時に宗人の拔陵、乱を為し、孔雀を以て大都督・司徒・平南王と為す。孔雀、部下一万人を率いて尔朱荣に降り、詔して平北將軍・第一領民酋長を加えられ、卒す。常、沉敏にして胆略有り、騎射を善くし、平西將軍に累遷す。高祖(高歡)起義し、常、附化守と為り、万俟受洛干と東歸す。高祖之を嘉し、上りて撫軍と為す。

とあり、彼の家柄は、朔州附化郡で代々部落を率いて遊牧していた匈奴系破六韓部の酋長であった。父の破六韓孔雀も酋長を世襲し、同族で六鎮の乱を引き起こした破六韓拔陵の勢力に合流して大都督・司徒・平南王となり、その後、一万の部落を率いて爾朱栄に服属して平北將軍・第一領民酋長となっている。破六韓常本人は、高歡が反爾朱氏の兵を挙げると本郡である朔州附化郡の太守に任命された。朔州は南流黄河の東側にあるが、附化郡の所在については、『北史』卷五三・本伝によると、

尔朱栄死、〔破六韓〕常帰河西。天平中、与冀州刺史万俟受洛干等東帰。

尔朱栄死するや、〔破六韓〕常、河西に帰る。天平中（534～537）、冀（靈？）州刺史万俟受洛干らと東帰す。

とある。破六韓常の郷里が河西にあることから南流黄河の西側に設置された郡にちがいない。爾朱栄の死後から高歡に降伏するまで、破六韓常は河西で部落を率いて遊牧していた。

以上、本章で触れたオルドスの諸勢力についてまとめると、斛拔弥俄突・紇豆陵伊利・万俟普撥・万俟受洛干・斛律沙門・破六韓孔雀・破六韓常は遊牧部落を率いる首領であり、曹泥・劉豊・叱干宝楽は部落組織は維持していないが北族系氏族であった。このように当時のオルドス地域には非漢族を中心に様々な民族が活動しており、各々の勢力は「控弦之騎不下一万」、「勝兵之士三千余人」、「部落五千戸」、「遺戸五千」などと記録され、数千～数万の衆を擁していた。特に部落組織を中核とする遊牧勢力は強大であり、当地の情勢を左右するほどであった⁽²⁰⁾。それ故、北魏の衰亡に乗じて抬頭した爾朱栄・宇文泰・高歡などの実力者や、北魏再興を目指す洛陽朝廷は、こぞって彼らに官爵を授けて自己の勢力に取り込もうとしたのである。

その具体例をまとめたのが表1「オルドス諸勢力の有力者の経歴」である。表では北魏の東西分裂前後にオルドスの在地有力者たちの出自と経歴を整理し、さらに官爵を授けた勢力を注記した。例えば、宇文泰は万俟普撥（№6）を建忠王に封じ司空・秦州刺史に任命し、その子万俟受洛干（№7）には三公より高位の太宰の官位を与えている。宇文泰がオルドスの遊牧勢力を非常に重視していたことが見て取れる。これに対して在地勢力側は、情勢に応じて手を結ぶ勢力を次々と替えた。前述の万俟受洛干は、反爾朱氏の兵を挙げた際に高歡に好を通じて撫軍將軍兼靈州刺史に任命されたが、その後、宇文泰が抬頭すると援軍を派遣してその関中制覇に協力した。次に高歡が夏州を奪取すると、再び父とともに部落を率いて東魏に降伏している。他の事例もこれと類似しており、このような彼らの叛服常無き性質は、西魏・北周政権によるオルドス経営の障壁となったのである。

表1「オルドス諸勢力の有力者の経歴」

№	姓名（種族）	経歴（官爵を授けた勢力）	出典
1	紇豆陵伊利 （費也頭）	河西・苦池河で遊牧→費也頭・紇豆陵歩藩の行台→北魏に服属→賀拔岳に服属→自立→高歡により敗死	魏書 75、周書 14、36、北齊書 1 神武上

2	斛拔弥俄突 (費也頭)	河西で遊牧→賀拔岳に服属→夏州刺史(宇文泰)→高歓の攻撃を受け降伏	周書1文帝上、北齊書2神武紀下
3	斛律沙門 (鉄勒)	河西で遊牧→賀拔岳に服属→使持節・車騎大將軍・中軍大都督(北魏)→開府儀同三司(孝武帝)	魏書11出帝、周書14 ※オールドスより中央の武官へ起用?
4	曹泥 (北族?)	靈州の在地有力者か?→靈州刺史(北魏・爾朱榮?)→西魏の攻撃を受け降伏→靈州刺史(西魏)→高歓に降伏	周書1文帝上、北齊書2神武紀下
5	劉豊 (匈奴)	靈州の在地有力者→普樂郡守(北魏・爾朱榮?)→靈州鎮城大都督(北魏孝莊帝)→衛大將軍・涼州刺史(宇文泰)→平西將軍・南汾州刺史(高歓に降伏)	劉安墓誌、北齊書2神武紀下、同書27、北史53
6	万俟普撥 (費也頭)	河西で遊牧→太尉(破六韓拔陵)→第二領民酋長・後將軍(北魏)→清水県公(孝武帝)→使持節・鎮北將軍・大都督・秦州刺史(孝武帝)→驃騎大將軍・儀同三司(孝武帝)→司空・秦州刺史・建忠王(孝武帝・宇文泰)→河西公(高歓に降伏)	北齊書27、北史53、周書1文帝上、魏書11出帝紀、北史6齊高祖紀
7	万俟受洛干 (費也頭)	父(№6)に従う→頭武將軍(北魏)→驃騎將軍・汾州刺史(爾朱榮)→自立し河西で遊牧→賀拔岳に服属→撫軍將軍・靈州刺史(高歓)→尚書左僕射(孝武帝・宇文泰)→儀同三司(宇文泰)→司空(宇文泰)→司徒(宇文泰)→大都督(宇文泰)→太宰(宇文泰)→建昌郡公(高歓に降伏)	北齊書27、北史53、北史5西魏文帝、北齊書2神武紀下 ※北史5では「壽樂干」に作る。
8	叱干宝楽 (鮮卑)	万俟普撥の部将→幽州刺史(宇文泰)→高歓に降伏	周書2文帝下、北齊書2神武紀下 ※「保楽」に作る史料もある。
9	破六韓孔雀 (匈奴)	酋長を世襲→大都督・司徒・平南王(破六韓拔陵)→平北將軍・第一領民酋長(爾朱榮)→卒	北齊書27、北史53本伝、北齊書2神武
10	破六韓常 (匈奴)	№9の子→平西將軍(爾朱榮?)→爾朱榮死後、河西で遊牧→附化郡守(高歓)→右衛將軍(宇文泰)→撫軍將軍(高歓に降伏)	紀下 ※附化郡は破六韓氏の本郡。

※書名に付した数字は出典とした巻数。「劉安墓誌」は、王其禕・周曉薇編著『隋代墓誌銘彙考』(線装書局、2007年)2巻280頁を参照。

2. 西魏・北周政権のオールドス経営

(1) 夏州の長官人事から見る西魏・北周政権のオールドス経営

北魏末期のオールドスには費也頭・破六韓・鉄勒など様々な遊牧勢力が存在しており、東西両魏の抗争を左右するほどの強大な軍事を有していた。西魏・北周政権は叛服常無き彼らをどのように対処して北辺経営を進めたのであろうか。当時の地方行政を中心的に担ったのは州長官たる

刺史であり、西魏では軍事的要衝には都督府、北周では総管府が置かれ複数の州に跨る管轄区が設定され、都督・総管の職を刺史が兼任して管轄区域の軍事と行政を統括した⁽²¹⁾。そこで、同時期にオルドス地域の中心地であった夏州・霊州の行政区域を確認しておこう。

まず、オルドス西方に設置された霊州であるが、西魏・大統十三年（547）に大都督として原州に出鎮していた王徳の肩書が「大都督・原靈頭三州五原蒲川二鎮諸軍事」であることから⁽²²⁾、霊州は原州を中心とする軍管区に組み込まれていたことがわかる。五原鎮はオルドス南縁に位置する後の塩州にあたり、王徳は原州に拠ってオルドス西半部を統括した。その後、北周・保定三年（563）に楊忠が「総管涇幽靈雲塩頭六州諸軍事・涇州刺史」となっていることから⁽²³⁾、北周時代の霊州は塩州（旧五原鎮）とともに涇州総管府に所属した。この体制は少なくとも天和三年（568）に楊忠が離任するまで続いたと思われ、オルドス西半部の統治は、北周期は原州府から涇州総管府に移管された⁽²⁴⁾。

一方のオルドス東方の夏州はどうであろうか。霊州に比べて関連史料が多く、就任した刺史・総管が15例も確認できる⁽²⁵⁾。それを編年して管轄地域や略歴等を整理したのが表2「西魏・北周期の夏州刺史・総管一覧表」となる。表2によって夏州府の管轄地の変遷を詳しく見ると、西魏が夏州の領有を確定させて以降、大統三～七年（537～541）の期間、夏州には都督府が置かれ東西北の三夏州を統括した。東夏州は後の延州のことで、西夏州は東夏州と区別するために付けられた夏州の異称である。北夏州については『隋書』以降の歴代の地理志や地理書に記録がなく詳細不明であるが、夏州北部に設置された州と考えられる⁽²⁶⁾。大統七年以降は基本的に夏州には都督府が置かれず、管轄範囲も夏州一州に限定されたが、どの都督府にも所属していない独立した体制が採られていた。その後、北周の保定三年（563）頃に赫連達が夏州総管となると「三州五坊諸軍事」を統括した。この三州がどれに該当するのか明確に記載した史料は無い。当時の夏州周辺の総管府の配置状況から考えて三州の内の二州は夏州と長州（旧南夏州、治長沢）が含まれていたのは確実であるが、残る一州については、塩州とする紀浩氏の説と銀州とする艾冲氏の説とがある⁽²⁷⁾。塩州説は保定三年時に涇州総管府の管轄範囲に含まれていることから成立しない。銀州は保定三年正月に新設された州で赫連達の総管就任時期とも合致するので、恐らく銀州説が正しい。長州・銀州はともにオルドス東南部に設置された州であり、夏州総管府はオルドス東半部を統轄したこととなる⁽²⁸⁾。

以上から北周時代のオルドス経営は、涇州・夏州の両総管府が中心になって推進されたこととなる。治所の位置を比べると、涇州総管府が遙か後方からオルドス西半部を統括したのに対して、夏州総管府は北辺最前線に位置してオルドス東半部を統括した。これは夏州が漠北の柔然・突厥だけでなく東魏・北齊とも境を接する重要拠点であるためである。それ故、夏州の長官人事を手掛かりにすれば、西魏・北周のオルドス経営の一端を明らかにすることも可能となろう。以下、

検討を加えたい。

表2「西魏・北周期の夏州刺史・総管一覧表」

No	姓名	任職期間／管轄領域／戎秩封爵	経歴	出典
1	拔也悉蚝	永熙3年2～4月	拔也氏は高車あるいは鉄勒系の氏族。	周1
2	斛拔弥俄突	永熙3年4月～大統2年正月	匈奴費也頭部、部落三千戸、勝兵五千人を率いる。州を挙げて高歓に降伏する。	周1、北斉2
3	長孫儉 (第一次)	大統3年10月～6年 都督東西北三夏州	宇文泰の夏州録事。謀主を務める。大統3年10月、夏州を奪回し刺史となる。	庚13 長孫儉碑、周26、北22
4	怡峯	大統6年～？ 東西北三夏州諸軍事・驃騎大將軍・開府儀同三司・樂陵郡公	遼西の人で本姓は黙台氏。賀拔岳が謀殺された際に、趙貴らと宇文泰を推戴。	周17、北65
5	劉平伏	?～大統7年3月(反乱)	河西に住む稽胡の別帥。	周15、49
6	宇文貴	大統8年頃?～? 驃騎大將軍・開府儀同三司・化政郡公	夏州の在地有力者。大統16年、大將軍に昇進、所謂「十二大將軍」に数えられる。	周19、16、北60
7	蔡襲	?～大統13年頃?	先祖は陳留圉県の人で、祖父蔡紹が夏州鎮將となった際に原州へ移住。子の蔡祐は夏州刺史宇文泰の帳内親信・都督を歴任。	周27、北65
8	王雅 (第一次)	廃帝3年以後 儀同三司・車騎將軍・居庸県伯 →驃騎大將軍・開府儀同三司・居庸県伯	南夏州闡熙郡新囿県の出身。父祖は無位無官で家柄は無く、軍功で顕貴となった人物。	周29、北68
9	李和	西魏恭帝元年頃～北周保定2年 夏州諸軍事、驃騎大將軍、開府儀同三司、新陽縣公→周元年、樂陵郡公	祖父は夏州の酋長となる。本人は郷兵集団を率いて、西魏・北周政権に仕えた。	李和墓誌、周29、北66
10	王雅 (第二次)	保定初(2年? 在任中卒) 驃騎大將軍・開府儀同三司・居庸県伯	No8 参照。	周29、北68
夏州総管府設置				
11	赫連達	保定初(3年正月頃?)～? 総管三州五防諸軍事・大將軍・藍田県公 ※三州=夏長銀三州	雲州盛樂の出身で赫連勃勃の後裔。趙貴らと宇文泰を推戴。	周27、北65
12	長孫儉 (第二次)	天和4年2～11月卒 柱国大將軍・昌寧公	No3 参照。	庚13 長孫儉碑、周5、26、北22
13	豆盧勳	在任期間は不詳、天和4年11月以降～建徳6年以前 大將軍(?)・楚国公	「十二大將軍」豆盧寧の嫡子で、楚国公を襲う。妹は齊王宇文憲の王妃。	隋1、39、北68
以下、就任時期不詳				
14	陰嵩	北周期(時期不詳)	夏州金明郡広洛県の人。祖志足	陰雲墓誌、隋

		驃騎大將軍・開府儀同三司	は武威太守、父買仁は銀州刺史。本人は北周で光祿大夫となり、邱目陵氏を賜った。	39、姓纂5
15	劉道	西魏? (時期不詳) 延夏二州刺史・夏州諸軍事	夏州西隣の塩州五原の人。子劉武は靈州府驃騎將軍となる。	劉德墓誌

【出典略号】周=『周書』、北齊=『北齊書』、北=『北史』、隋=『隋書』、庾=『庾子山集』、姓纂=『元和姓纂』、数字=巻数

【墓誌の出典】王其禕・周曉薇編著『隋代墓誌銘彙考』(線装書局、2007年)、「李和墓誌」(1巻25頁)、「劉德墓誌」(4巻201頁)、「陰雲墓誌」(1巻110頁)

さて、西魏・北周政権は、如何なる人物を夏州の長官に起用したのであろうか。表2によってその傾向を述べると、全15例のうち9例が夏州周辺の在地有力者であった。その内訳は夏州出身者が5例(№6、8、9、10、14)、周辺出身者が2例(№7、15)、部落を維持していた遊牧勢力が2例(№2、5)となる。ここからは西魏・北周政権が在地の有力者を取り込み、夏州を統治したことが読み取れる。以下、個々の家柄・背景について詳しく述べる。

まずは夏州出身者について。№6 宇文貴の家柄は、先祖が昌黎大棘から夏州に移住した北族系氏族であること以外は具体的に不明である。ただし、『周書』巻十九・宇文貴伝によると、

元顥入洛、〔宇文〕貴率郷兵從爾朱榮焚河橋、力戰有功。

元顥の洛に入るや、〔宇文〕貴、郷兵を率いて爾朱榮に従い河橋を焼き、力戦して功有り。

とあり、北魏末期に彼が爾朱榮の部将として郷兵を率いて軍功を挙げていることから、郷兵を結集できる実力を持った在地有力者であったことが明らかになる。

№9 李和は『周書』巻二九・本伝によると、

李和、本名慶和、其先隴西狄道人也。後徙居朔方。父僧養、以累世雄豪、善於統御、為夏州曾長。和少敢勇、有識度、狀貌魁偉、為州里所推。

李和、本名は慶和、其の先隴西狄道の人なり。後に朔方に徙居す。父僧養、累世の雄豪にして、統御を善くするを以て、夏州の曾長と為る。和、少くして敢勇にして、識度有り、狀貌魁偉なれば、州里の推す所と為る。

とあり、漢人名族の隴西李氏を自称するが、その家は「累世の雄豪」であり、父李僧養は北魏政権下で夏州の曾長となった。李和は北魏末にいたるまで部落組織を維持していた北族の可能性が高い。彼自身もまた武勇に秀で見識もあることから、在地社会で重んじられるような人物で、墓誌によると、六鎮の乱の際は郷兵集団を率いて夏州刺史源子雍に協力して鎮圧にあたっている⁽²⁹⁾。

王雅(№8、10)は闡熙郡新囿県の人である。闡熙郡は西魏では南夏州(長州)に属したが、『魏書』巻一〇六下・地形志下によると北魏では夏州に属していたので、彼は夏州出身者と見なせる。その父祖の経歴は『周書』巻二九・本伝には記されておらず、地域社会に大きな影響力を持ったとは考えられない。宇文泰に仕えて軍功を挙げることで顯官となった勲貴であろう。

№14 陰嵩は息子陰雲の墓誌によると、夏州金明郡広洛県の人とある。陰雲とは陰寿（字羅雲）のことで、『隋書』卷三九に立伝されている人物である。列伝では「武威人」としており墓誌と記述が異なるが、武威郡は陰氏の代表的な郡望であり、列伝では陰寿が名乗る郡望を記し、墓誌は現住地あるいは本貫地を記したと推定される。「陰雲墓誌」によると陰嵩は、「魏武遷播、頗勞羈勒。周文匡弼、亦寄爪牙（魏武遷播して、頗る羈勒を勞す。周文匡弼して、亦た爪牙を寄す）。」とあって、北魏末の孝武帝（魏武）の入關の際には既に宇文泰（周文）に仕えていた。父の陰買仁は銀州刺史で、銀州は前述の如く保定三年設置の夏州総管府所轄の州である。陰買仁・陰崇はともに郷里周辺の刺史に任命されており、夏州地域に影響力を保有していたと見てよい。

次に夏州周辺の遊牧勢力として、費也頭の斛拔弥俄突（№2）、稽胡帥の劉平伏（№5）の例が挙げられる⁽³⁰⁾。費也頭については前章に詳述した。稽胡⁽³¹⁾とは「山胡」とも称され、北朝時代に主としてオルドス及び南流黄河沿いの山間部に生息していた雑胡とされる。『周書』卷四九・異域伝上・稽胡に、

〔稽胡〕居河西者、多恃險不賓。時方与齊神武争衡、未遑經略。太祖乃遣黃門郎楊擲就安撫之。〔大統〕五年、黒水部衆先叛。〔大統〕七年、別帥夏州刺史劉平伏又拋〔延州（南夏州）〕上郡反。自是北山諸部、連歲寇暴。

〔稽胡〕河西に居る者、多く險を^{したが}恃み賓わず。時に方に齊の神武と争衡し、未だ經略に遑あらず。太祖乃ち黃門郎楊擲を遣わして就きて之を安撫せしむ。〔大統〕五年（539）、黒水の部衆、先に叛く。〔大統〕七年（541）、別帥の夏州刺史の劉平伏も又た〔延州（南夏州）の〕上郡に抛り反く。是れ自り北山の諸部、連歲寇暴す。

とあるように、稽胡の一派が河西と黒水（烏水、現哈柳図河）流域に居住しており、政權の脅威となっていた。別帥の劉平伏が夏州刺史に起用されたのは、稽胡を慰撫し夏州の統治に利用するためであろう。ただし、その試みは反乱を起こされており失敗している。

次に夏州周辺の出身者の事例。№7 蔡襲の家は祖父蔡紹が北魏期に夏州（統万鎮）の鎮將を務めたおり、陳留郡から原州高平に移住した。蔡襲自身の名声も西州（閩隴）に鳴り響いていたとされる。№15 劉道は夏州・靈州近傍の塩州五原郡の人。その子劉武は靈州府驃騎になっており、郷里近傍の軍府官となった。隋初の軍府官には「豪右」を登用して郷兵を統率させる事例⁽³²⁾が散見され、塩州の劉氏はオルドス南縁部に影響力を持っていた氏族と推定される。

そのほか、かつて夏州を本拠地にしていた赫連勃勃の子孫の起用が1例見られる。№11 赫連達は曾祖父庫多汗が仇敵を避けて杜氏に改姓し、西魏の虜姓再行政策によって赫連姓に復した。赫連達本人は雲州盛樂の出身だが、赫連氏は赫連夏滅亡後もなおも夏州への影響力を保持していた。例えば、赫連勃勃の五代孫の赫連子悦は、北齊に仕えて夏州大中正となっている⁽³³⁾。子悦とは別系統の赫連遷は東魏で征虜將軍・夏州大中正となった⁽³⁴⁾。更に別系統の赫連儒もまた北魏・神龜

二年（519）六月三日発願の造像記⁽³⁵⁾によると「前武衛將軍・夏州大中正・使持節・都督汾州諸軍事・平北將軍・汾州刺史」となり、その第二子赫連悦の墓誌⁽³⁶⁾によると、後に「撫軍將軍・夏州刺史」となっている⁽³⁷⁾。本州大中正は各州の名族が充てられるのが慣例であり⁽³⁸⁾、北朝末期、赫連氏は夏州の有力氏族と認識されていたのである。こうした事例をふまえると、赫連達が赫連勃勃の子孫であるという血統は、かつての赫連夏の旧領を統治するうえで、有利に作用したと見てよかろう。

以上に述べた夏州周辺の有力者以外の他には、西魏・北周政権の成立と発展に高い功績を挙げた有力将帥とその血縁者の起用が西魏・北周を通じて目立つ。まず、№3 長孫儉は夏州刺史となった宇文泰により録事に辟召され、宇文泰が武川鎮軍閥を継承するにあたって参謀役を務めた。№4 怡峯もまた宇文泰の軍閥継承を積極的に支持した人物である。№13 豆盧勣は西魏北周の元勳で所謂「十二大將軍」豆盧寧の嫡子で、その妹は齊王宇文憲の王妃であった。以上は、西魏・北周の支配集団の中でも中枢部に位置する人々なのである。

夏州に影響力を保有した有力者と西魏・北周政権の有力将帥の両面を兼ね備える人物も起用されている。前述の№6 宇文貴、№9 李和、№7 蔡襲、№11 赫連達である。宇文貴は後に所謂「十二大將軍」に列する功臣であり、宇文泰に同姓であることから宗室として重んじられ、北周期に大司徒・許国公にまで至った。李和は「十二大將軍」には及ばないものの、『周書』本伝によると、夏州刺史就任時には、驃騎大將軍・開府儀同三司となり宇文氏を賜姓され、宇文泰より「智略明贍、立身恭謹。累經委任、每稱吾意（智略明贍にして、身を立つれば恭謹なり。累ねて委任を経て、毎に吾が意に称う。）」と評され、「意」の名を賜与された。彼もまた宇文泰の信任厚き将帥であった。赫連達は賀拔岳の死に際して宇文泰に武川鎮軍閥を継承させるべく、夏州への使者を買って出た人物である。また、蔡襲の息子蔡祐は宇文泰が夏州刺史となると都督に登用され、泰の暗殺を企てた夏州の首望・弥姐元進を討ち取る功績を挙げている⁽³⁹⁾。

最後に目を転じて時系列に沿って長官任用者の変遷を見ると、鍾盛氏が明らかにされた西魏・北周期の州長官人事の全体的傾向と一致している⁽⁴⁰⁾。西魏政権は北辺より入關した武川鎮出身者を中核にして形成されたため、その基盤は脆弱で閩隴地域所在の諸勢力を取り込む必要があった。そのための施策の一つが有力功臣を本州刺史に起用して、彼らの地域社会への影響力を地方統治に利用することであった。西魏初期に叛服常ない費也頭や稽胡の首領を刺史に任命したのは、政権基盤が脆弱であったための已む得ない処置であり、こうした状況を打破するための施策が宇文貴・李和・王雅ら夏州出身の有力将帥の起用であった。彼らは政権への忠誠心が強く、夏州地域を中央につなぎとめておくのに格好の人材であった。北周後期に長孫儉が夏州総管に起用されて以降は、本州刺史の事例が無くなるが、これは北周の実権を握っていた宇文護による中央集権政策が実を結び、本州刺史を介さずとも夏州の統治が可能となったからなのである。

(2) 宇文護による北辺経営の進展

前節で論じた西魏・北周政権による夏州統治の成果は、北周の執政宇文護による北辺経営の進展にもつながった。以下、長孫儉（表 2№12）が夏州総管に起用されたことを手掛かりに考察を加えたい。

まず、長孫儉の夏州総管の在任期間は、『周書』巻五・武帝上によると、天和四年（569）二月より、十一月に彼が死亡するまでとなる。その同年に宇文護は、『周書』巻十一・本伝によると、

〔天和〕四年、〔宇文〕護巡歴北辺城鎮、至靈州而還。

〔天和〕四年、〔宇文〕護、北辺の城鎮を巡歴し、靈州に至りて還る。

とあり、自ら北辺の城鎮を視察して靈州まで到達し、長安に帰還した。この「北辺巡歴」を直接伝える記事はこれに尽きるが、この事実をおさえたいうえで周辺史料に当たると、その前後に宇文護が北辺の防衛のために積極的に手を打っていく様子が浮かび上がってくる。

まず、『周書』巻五・武帝紀上・天和四年の条によると「六月、築原州及涇州東城。」とあって、オルドスと長安を結ぶ軍事的な要衝でもある原州・涇州の防備を固めている⁽⁴¹⁾。さらに翌年には開府劉雄を派遣して綏州方面から「北辺川路」を巡検させた。『周書』巻四九・異域上・稽胡伝によると、

〔天和〕五年、開府劉雄出綏州、巡検北辺川路。稽胡帥喬白郎・喬素勿同等度河逆戦、雄復破之。

〔天和〕五年（570）、開府劉雄、綏州より出で、北辺の川路を巡検す。稽胡帥の喬白郎・喬素勿同ら河を度り逆戦し、雄復た之を破る。

とある。当時、劉雄は『周書』巻二九・本伝によると、開府儀同三司の他に、中外府の掾に在任しており、この巡検が都督中外府を主宰する宇文護の指示で実行されたと推測できる。綏州は北辺の夏州・銀州の東南に位置し、それらの三州は無定河沿いの交通路をもって連結されている⁽⁴²⁾。

「北辺川路」とは無定河を利用した水上交通路を指すのであろう。また、綏州はオルドスから夏州・銀州を通り延安を抜けて長安へ向かう中継地点の一つであり、南流黄河を挟んで北齊領と接する国防上の重要拠点でもある。その周辺には稽胡が多く居住しており、劉雄は曾帥の喬白郎・喬素勿同らを討って、上述の交通路の安全を確保したと思われる。

以上の宇文護の施策からは、その目的がオルドス南縁の夏州・靈州と長安を結ぶ中継地点の防衛体制を強化することにあったことが明らかになる。この点をふまえた上で長孫儉の夏州総管起用について考えると、そこには重要な意味が込められていたことが見えてくる。そもそも、『周書』巻二六及び『北史』巻二二の本伝によれば、長孫儉は夏州刺史時代より宇文泰に仕えた宿将であり、東魏より夏州を奪還するなど、西魏初期の夏州経営に功績があった。また、二度も荊州刺史・

東南道行台を務め、西魏が江陵を占領すると、宇文泰の特命を受けて初代の江陵総管に任命され、南朝と接する国境地帯の経営でも大きな成果を挙げた。こうした政権の信頼も厚く辺境経営に長く夏州の事情にも通じた人物が、宇文護による「北辺巡歴」の同年に起用されたのは、北辺の防衛体制を強化するための布石なのである。

さらに宇文護は、段永に軍団を率いさせてオルドス北端の賀葛城に駐屯させている。庾信撰「爾綿（段）永碑」（『庾子山集注』巻十四・碑、建徳二年（573）二月葬）によると、

又任左廂第三軍総管、仍被敕將兵馬北道教習。韓信入関、即申軍令、陳農受詔、仍校兵書。豈直六郡良家、五營騎士、懸知正正之旗、遙識堂道之氣。蒙犯霜露、旗鼓驅馳。俄而遭疾、遂至大漸。〔天和〕五年六月十六日、薨於賀葛城、春秋六十有八。

又た左廂第三軍総管に任ぜられ、仍お教を被りて兵馬を北道に將いて教習す。韓信の入関するや、即ち軍令を申べ、陳農は詔を受けて、仍お兵書を校す。豈に直だ六郡の良家、五營の騎士、懸けて正正の旗を知り、遙かに堂道の氣を識るのみならんや。蒙りて霜露を犯し、旗鼓驅馳す。俄かにして遭疾し、遂に大漸に至る。〔天和〕五年六月十六日、賀葛城に薨ず、春秋六十有八なり。

とあり、段永は勅命を奉じて北道で軍事訓練を行った。これとほぼ同じ記事が『周書』巻三六及び『北史』巻六七の段永伝にも見え、それによると、天和四年（569）頃のことである。碑では段永の官職が「左廂第三軍総管」とあるのに対して『周書』・『北史』では「右二軍総管」とあり、「廂」の字が省略され軍団の識別番号も相違するが、何れにしても中央から派遣された一軍を率いる司令官となる⁽⁴³⁾。当時の兵権は「都督中外諸軍事」である宇文護によって掌握されており、その主導の下で段永の北道教習が行われたと見てよい。また、段永は翌年六月十六日に賀葛城で没しており、当地が「左廂第三軍」の駐屯地であった。賀葛城は保定三年（563）に永豊鎮が設置された屈曲する黄河の西北部北岸に設置された城塞で、北魏の孝文帝によって夏州の北境とされた地でもあり⁽⁴⁴⁾、突厥と境界を接する最前線でもあった。段永による「北道教習」が、東流黄河まで対突厥防衛線を押し上げ、突厥を牽制するためのものであったことは明らかである。

おわりに 一北周の北辺経営と武帝の華北統一

本稿では、西魏・北周政権の北辺経営について、オルドス地域を中心にして考察した。同地域には、費也頭・破六韓・鉄勒・稽胡など強大な遊牧部族が存在しており、そのため当地域を支配下に置こうとした勢力は、競って彼らの取り込みを図った。関中に割拠し西魏政権を打ち立てた宇文泰もまた、東魏の高歓とのオルドス争奪戦に勝利すべく、在地の遊牧勢力の首領を夏州刺史に任命することで同地域を取り込もうとした。オルドスより高歓の勢力を駆逐すると、西魏・北

周政権は在地出身の有力将帥を夏州の刺史・総管に起用して徐々に中央の影響力を浸透させた。その成果を承けて、宇文護は天和四年（569）に宇文泰以来の宿将長孫儉を夏州総管に起用し、これと前後して積極的に北辺地域の防衛体制を固め、対突厥防衛線をオルドス北端にまで押し上げたのである。

その少し前、北周は突厥との和親を結ぶことに腐心し、突厥・木杆可汗（在位 553～572）の要請の下で保定三～四年（563～564）に北斉討伐を二度にわたり敢行した。ところが、北斉討伐の失敗により木杆可汗は北周が通婚を求める使者を抑留し、北斉との通婚を企図した。ようやく天和三年（568）三月になり、武帝（在位 560～578）は木杆可汗の娘を皇后に迎えて和親に漕ぎ着けた⁽⁴⁵⁾。翌年に宇文護が積極的に北辺経営へ乗り出したのは、このような国際情勢に乗じたものと言える。しかしながら、宇文泰以来、オルドス地域の叛服常ない遊牧勢力に対処しながら、徐々に中央権力を浸透させていった北辺経営の進展も前提としてある。こうした北辺経営の成果は、約四年間にわたり北周・北斉を両天秤にかけていた木杆可汗の判断にも影響を与えたはずである。

その後、天和七年（572）三月、武帝は宇文護を誅殺して親政を開始する。彼がまず着手したのが、中央軍である「二十四軍」を掌握することであった⁽⁴⁶⁾。『周書』巻四・武帝紀上・建徳三年（574）十二月の条によると、

十二月戊子、大会衛官及軍人以上、賜錢帛各有差。辛卯、...詔荆・襄・安・延・夏五州総管内、有能率募從軍者、授官各有差。其貧下戸、給復三年。丙申、改諸軍軍士並為侍官。

十二月戊子、大いに衛官及び軍人以上と会し、錢帛を賜ること各おの差有り。辛卯、...荆・襄・安・延・夏五州総管内に詔して、能く募を率いて從軍する者有れば、官を授くること各おの差有り。其の貧下戸、三年を給復す。丙申、諸軍の軍士を改めて並びに侍官と為す。

とあり、武帝は「衛官」・「軍人」を集合させて錢帛を賜与し、諸軍の「軍士」を「侍官」と改称して将兵の収攬を図っている。注目すべきは、その軍事改革を推進する最中に、夏州を含めた国境地帯に置かれた五総管府にて募兵を行い、兵力の強化を図っていることである⁽⁴⁷⁾。この時の募兵形式は郷兵集団を結集させたものであり、該当地域の在地有力者の協力が不可欠となる。こうした勅令が下されたのは、夏州も含めた北周の地方統治が一定の成功を収めていたことが前提にあったに違いない。そして、軍事力の強化と辺境の安定は武帝に次なる決断を促した。翌年八月、武帝は自ら大軍を率いて北斉領に雪崩れ込み、遂に建徳六年（577）二月に北斉を併呑して宿願の華北統一を果たした。その成功には、本稿で明らかにした北辺経営の成果も反映されているのである。

註

(1) 森安孝夫著『シルクロードと唐帝国』（講談社、2007年、2016年に講談社学術文庫に再録、

一部補訂)。

- (2) 石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』(汲古書院、1998年) 導言、同著『唐代の国際関係』(山川出版社、2009年)を参照。そのほか、同氏「ラティモアの辺境論と漢～唐間の中国北辺」(唐代史研究会編『東アジア史における国家と地域』、刀水書房、1999年)、「唐とテュルク人・ソグド人—民族移動・移住より見た東アジア史—」(『専修大学東アジア世界史研究センター年報』1、2008年)、「唐の成立と内陸アジア」(『歴史評論』720、2010年)、「ユーラシアの民族移動と唐の成立—近年のソグド人関係新史料を踏まえて—」(『専修大学古代東ユーラシア研究センター年報』2、2016年)などの諸論文も参照。
- (3) 「農牧接壌地帯」の概念については、森安註(1)前掲書、第1章「シルクロードと世界史」「農牧接壌地帯」を参照。ただし、石見氏は、同地帯を「中国北辺のベルト状地帯」と呼称している。註(2)前掲「ラティモアの辺境論と漢～唐間の中国北辺」を参照。
- (4) 石見清裕「唐の建国と匈奴の費也頭」(初出1982年、同氏著『唐の北方問題と国際秩序』、汲古書院、1998年)。
- (5) 平田陽一郎「突厥他鉢可汗の即位と高紹義亡命政権」(『東洋学報』86-2、2004年)、「周隋革命と突厥情勢—北周・千金公主の降嫁を中心に—」(『唐代史研究』12、2009年)、「隋・趙世摸墓誌」の訳注と考察」(『沼津工業高等専門学校研究報告』47、2013年)など。
- (6) 斉藤茂雄「隋末唐初期における突厥第一可汗国と北中国」(『関西大学東西学術研究所紀要』49、2016年)。
- (7) これまでの五胡十六国から北朝時代にかけてのオルドス地域に関する研究では、人口・民族の構成、赫連夏をはじめとする興亡した遊牧勢力・政権の動向、地政学的考察、交通路、産業、環境の変遷、行政区画の沿革など様々な問題が論じられてきた。その全てを整理するのは本稿では不可能であるので、ここでは現在の研究を方向付けた、前田正名「平城から西域に通じる交通路」(初出1972年、同著『平城の歴史地理学的研究』、風間書房、1979年)、史念海「兩千三百年来鄂爾多斯高原和河套平原農林牧地区的分布及其變遷」(初出1980年、同著『河山集』第三集、人民出版社、1988年)、嚴耕望「唐代河套地区軍事防禦系統」(同著『唐代交通図考』第1巻、中央研究院歴史語言研究所、1985年)のみを挙げておく。そのほか、陝西師範大学西北環堯中心編『統万城遺址綜合研究』(三秦出版社、2004年)、最近刊行された侯甬堅等編『統万城建城一千六百年國際學術研討會文集』(陝西師範大学出版總社、2015年)にも関連する專論を多く収録する。

また、本稿で対象とする西魏・北周時代については、当地域に設置された州県の沿革や改廃を明らかにした紀浩「周隋時期鄂爾多斯高原總管府的沿革」(『西安社会科学』第29巻第2期、2011年)、艾冲「北朝時期『河曲』地域行政区画建制的演替」(初出2013年、同著『河套歴史

地理新探』、科学出版社、2015年）があるが、具体的にオルドス地域をどのように経営したのかという考察は、管見の限り見当たらない。

- (8) 「武川鎮軍閥」については、谷川道雄「武川鎮軍閥の形成」（初出1982年、同著『増補 隋唐帝国形成史論』、1998年、筑摩書房）を参照。
- (9) なお、ここで言う「河西」とは所謂河西回廊を指すのではなく、南流する黄河以西の地、現在のオルドスに該当する地域を指す用語である。むしろ、北朝の正史では後者の意味で用いられることが多い。本稿では特に断らない限り引用史料の「河西」はオルドスを指しているものと解釈する。
- (10) 註(4)前掲、石見清裕「唐の建国と匈奴の費也頭」。
- (11) 斛拔弥俄突は前述した通り北魏末の夏州刺史で賀拔岳に服属した。宇文泰が夏州刺史となったのにもない刺史職を解かれ、西魏成立後に再び任命されたと思われる。
- (12) なお、「阿至羅」とは、当時、高歡が手懐けていた遊牧部族のことで、『北齊書』卷一・神武上によれば「阿至羅虜、正光以前常称藩、自魏朝多事、皆叛。神武遣使招納、便附款。……其酋帥吐陳等感恩、皆從指麾、救曹泥、取万俟受洛干、大収其用。」とある。
- (13) 唐長孺「北魏末期的山胡勅勒起義」（初出1964年、同著『山居存稿』中華書局、2011年）。
- (14) 中華書局本の『元和姓纂』に付された岑仲勉氏の四校記に拠って「高昌王」の三字を補った。劉豊が「高昌王」に封ぜられたことは『北齊書』及び『北史』の本伝には言及が無く、『旧唐書』卷一八七上・忠義・劉感伝、後註の「劉安墓誌」にのみ記されている。
- (15) 「劉安墓誌」については、王其禕・周曉薇編著『隋代墓誌銘彙考』（線装書局、2007年）2巻280頁を参照。1980年代に西安長安県洪固郷出土、陝西省考古研究所所蔵。
- (16) 王仲犛『北周地理志』（初版1980年、中華書局、2007年）卷一・関中・靈州。
- (17) 『北齊書』卷二七、『北史』卷五三の本伝を参照。なお、万俟普撥が秦州刺史として拠った覆靺城の位置については、中華書局本『魏書』卷十一・廢出三帝紀の校勘記[一二]では東秦州の領域内とし、王仲犛『北周地理志』卷二・秦州では、秦州の治所が上邽より覆靺城に移されたとして、その位置を河陽の北と想定する。しかしながら、劉豊が涼州刺史に任命されながらも靈州に居続けたように、万俟普撥もまた秦州へ赴任せず河西に留まっていたとも考えられ、オルドスに覆靺城があった可能性もある。
- (18) 『北史』卷五三・劉豊伝を参照。
- (19) 姚薇元『北朝胡姓考（修訂本）』（初版1962年、中華書局、2007年）内篇第四、四方諸姓、十三薛氏を参照。
- (20) なお、言うまでもないが、夏州・靈州には漢人も居住していた。ただし、その勢力は弱かったようで、池田温「唐代の郡望表一九・十世紀の敦煌寫本を中心として一」（初出1959～1960

- 年、同氏著『唐史論攷一氏族制と均田制一』、汲古書院、2014年）所掲の各種郡望表を確認しても、有力な漢人氏族の存在が全く挙げられていない。その理由として本地域が漢人が基盤とする農業ではなく、牧畜が主流であったことが挙げられよう。
- (21) 西魏・北周期の地方行政については、嚴耕望撰『中国地方行政制度史 乙部 魏晉南北朝地方行政制度 下冊』（中央研究院語言研究所、1990年）を参照。嚴氏によると西魏の都督及び北周の総管府の権限は、管轄州の軍事だけでなく、行政や人事（刺史の任免）などにも及んだとする。
- (22) 『周書』卷十七・王徳伝。本文で言及しなかった顛州は、王仲犖『北周地理志』所収「東西魏北齊北周矯治六州考略」によると、西魏時代に寧州北地郡羅川県（甘肅省西寧県南）に置かれた矯州。蒲川鎮については所在不明。
- (23) 『周書』卷十九・楊忠伝を参照。顛州・雲州とともに矯州。顛州については前註参照。前註「東西魏北齊北周矯治六州考略」によると、雲州は西魏時代に陽周（甘肅省慶陽県西峰鎮）に置かれ、北周の保定二年（562）に廃された。その後、天和元年（566）に眉城県西の斜谷城（陝西省眉城県城関）に置かれた。
- (24) なお、『隋書』卷二九・地理志上、『元和郡県図志』卷四によると靈州に総管府が設置されたが、それは楊忠が涇州総管より離任して以降のことであろう。総管の事例は北周末の大象年間（579～581）に就任した劉昶があるのみで、刺史の事例は北周初期の賀若誼のみである。『周書』卷十七・劉亮附劉昶伝、『隋書』卷三九・賀若誼伝、王友懷主編、李慧・曹覺展注考『咸陽碑刻』（三秦出版社、2003年）所収「賀若誼碑」を参照。
- (25) 靈州の長官の事例については、前註で言及した二例のみとなる。
- (26) 註(7)前掲の艾冲論文を参照。
- (27) 註(7)前掲の紀浩・艾冲両氏の論文を参照。なお、長州（南夏州）の沿革については、註(16)前掲『北周地理志』卷一・長州を参照。
- (28) なお、夏州総管府が管轄した「五坊」については不明であるが、総管府区域内に置かれた五ヶ所の防御拠点のことであろう。「坊」については、平田陽一郎「西魏・北周時代の「防」について」（『福井重雅先生古稀・退職記念論集 古代東アジアの社会と文化』、汲古書院、2007年）を参照。また、註(21)嚴氏前掲書によると、建徳年間（572～578）に銀州は延州総管府に移管された。
- (29) 李和の墓誌と事跡については、王去非・王昕「隋李和墓志綜考」（『宿白先生八秩華誕紀念文集』、文物出版社、2002年）、羅新・葉煒『新出魏晉南北朝墓志疏証』（中華書局、2005年）「119 李和墓志」を参照。なお、李和の種族については前者が吐谷渾、後者が稽胡とするが、何れも有力な根拠が示されていない。

- (30) 拔也悪蚝(表2 №1)は宇文泰の関隴平定の過程で、夏州刺史から秦州刺史に配置換えとなったこと以外は経歴不詳。「拔也」は陳連慶『中国古代少数民族姓氏研究』(吉林文史出版社、1993年)によると、高車もしくは鉄勒系の氏族とされる。本稿でも言及したが、北魏末に鉄勒系の斛律沙門がオルドスで遊牧しており、拔也悪蚝もまた同時期に当地の遊牧勢力であった可能性が高い。その夏州刺史への起用も斛拔弥俄突や劉平伏と類似する事例と思われる。
- (31) 稽胡については、林幹「稽胡(山胡)略考」(『社会科学戦線』1984年1期)、滝川正博「北周における「稽胡」の創設」(『史観』160、2009年)などを参照。
- (32) 例えば、劉武に類似する事例として、隋初に劉權が車騎將軍(兼儀同三司?)の資格で、樊子蓋が儀同の資格で、それぞれ郷兵を統率したことが挙げられる。『隋書』卷六三所収の劉權伝及び樊子蓋伝を参照。
- (33) 「赫連子悦墓誌」(北齊・武平四年(573)十一月葬)については、『鴛鴦七誌齋藏石』(三秦出版社、1995年) №160を参照。
- (34) 賈文振編著『文化安豊』(大象出版社、2011年) 228頁所収の「赫連遷墓誌」(北齊・武平四年(573)十一月葬)を参照。
- (35) 「赫連儒造像記」は、張乃羲輯『龍門区系石刻文萃』(国家図書館出版社、2011年) 18頁。
- (36) 「赫連悦墓誌」(北魏・普泰元年(531)七月葬)については、楊万里著『漢魏南北朝墓誌集釈』(科学出版社、1956年)を参照。
- (37) 赫連儒の事例については、牟発松「赫連勃勃後裔及其姓氏變動略考—以石刻文献為中心」(前掲註(7)『統万城建城一千六百年國際學術研討會文集』所収)を参照。
- (38) 宮崎市定『九品官人法の研究』第二編第五章「北朝の官制と選挙制度」(初出1956年、中央公論社、1997年)。
- (39) 『周書』卷二七・蔡祐伝。
- (40) 鍾盛「西魏北周『作牧本州』考析」(『魏晉南北朝隋唐史資料』25、2009年)。
- (41) 『周書』卷二文帝下に「〔大統〕十三年(547)春正月、茹茹寇高平、至于方城。」とあり、原州の治所高平に柔然(茹茹)が侵攻した。原州は現在の寧夏回族自治区の固原市にあたり、オルドス方面から長安へ至る主要幹線路沿いに位置している。
- (42) 註(7)前掲『唐代交通図考』第1卷篇十「関内河東間河上諸関津及其東西交通線」を参照。
- (43) 本碑文によると、段永が統率した「左廂第三軍」を前漢時代に禁軍の羽林兵を供給した「六郡良家」、あるいは後漢時代の近衛兵である「五宮騎士」に擬らえており、中央軍である二十四軍(左右十二軍)を構成する一軍であったと思われる。ただし確証は無く、本稿では可能性のみを指摘しておく。
- (44) 『元和郡県図志』卷四・豊州の条に「後魏太武帝滅赫連昌、置統万鎮。孝文帝改置夏州、

其地又為夏州之北境。」とあり、永豊県の条には「本漢臨戎旧地、後漢末廢。北人又謂之賀葛真城。周武帝保定三年、於此置永豊鎮。」とある。

(45) 西魏・北周期の国際情勢については、菅沼愛語「西魏・北周の対外政策と中国再統一へのプロセス—東部ユーラシア分裂時代末期の外交関係—」(『史窓』70、2013年)を参照。

(46) 武帝が二十四軍を掌握する過程については、平田陽一郎「西魏・北周の二十四軍と「府兵制」」(『東洋史研究』70-2、2011年)を参照。

(47) 本文中で引用した『周書』武帝紀上の記事は、『隋書』卷二四・食貨志の「建徳二年(三年の誤記)、改軍士為侍官、募百姓充之、除其県籍。是後夏人半為兵矣。」に対応する記事と考えられ、「府兵制」の研究では論点の一つとなっており、この措置を兵民一致のためとするか、逆に兵民分離のためとするかで二つの説が対立している。何れにしても大規模な兵員増強が行われており、夏州総管府の管轄区域も重要な兵力源となったのは確実である。当該時代の「府兵制」研究史については、氣賀澤保規著『府兵制の研究—府兵兵士とその社会—』(同朋舎、1999年)第I篇第1章「前期府兵制研究序説」を参照。

(明治大学文学部兼任講師)